

テレサは後悔した。

彼女は最近、三歳上のマークと結婚した。マークは、最近の軟弱な男性のなかにあつては、男らしい、否、男らしく振る舞うことを好むタイプだった。頑丈な体つきは、夫として頼もしく見えた。少しばかり傲慢なところがあったが、恋に落ちた女性は、欠点を見まいとする。その傲慢さが、彼の本性だと気づいたのは、式を挙げた直後だった。

結婚式当日、新郎新婦がロマンチックな時を過ごすべきその夜、べろべろに酔っ払ったマークは、嫌がるテレサにフェラチオを強要したのだ。いやがるテレサの口にペニスをねじ込み、頭をつかんで腰を前後させた。喉に当たって苦しむテレサの懇願も無視し、精液を口のなかにぶちまけ、さらに強姦同然に彼女を犯した。

優しさのかけらもないマークの豹変ぶりにテレサは困惑し、嫌悪感を抱いた。
そして次の夜。

夕食を終えた後、マークはいきなり、テレサをベッドに押し倒した。

「ちよ、……ちよっと待ってよ……」

テレサは抗った。

「いきなり、やめてよ！」

彼女は、慣れないフェラチオを強要された昨夜の忌々しい経験から、その気になれずにいた。
「うるさい！」

マークは彼女を押さえつけて怒鳴った。

「おとなしく、言うことをきくんのだ！」

マークは、テレサのパンティを引き裂き、いきなり挿入しようとした。

「いやよ！」

テレサは必死で抵抗した。

「せめて、コンドームくらい着けてよ」

「だめだ！」

マークは宣言した。

「早く子どもを作るんだ！」

「だって……子どもはまだ……」

テレサは、勤めている会社で大きなプロジェクトに参加している。成功すれば昇進の道が開ける。だから、子どもを作るのは数年先と約束していたのだ。

「だめだ！ ダディに言われたんだ。早く子どもを作れって」

マークは、父親を尊敬しており、なんでも言うことをきく。マークの父親は、それこそ男性優位主義者で、マークはそんな父親を手本として育った。

いいか、マーク。

父親は、子どもだったマークにこう言い聞かせてきた。

お前は、金玉ついてるんだろ？ 女には金玉がない。だから、男のほうが偉いんだ。

マークの父親は、巨大な、ジャンボサイズの卵大の睾丸をぶらさげていた。睾丸の巨大さは、マークにも遺伝していた。父親並とはいえなかったが、ゴルフボールくらいの大きさはあった。

この大きな睾丸で、男の子を産ませ、「男の中の男」に育てるのが、父親から命ぜられた使命だった。

ファザコン……。

テレサは、女を軽蔑しきった義父の顔を思い浮かべ、憎悪の念が沸き起こってきた。

「分かったか！ 分かったら、さっさと足を開け！」

「分かったわ……」

テレサは抵抗をやめ、静かに言った。

「でも、心の準備ができるまで、ちよっと待って。フェラチオしてあげるから」

マークは承知し、仁王立ちになった。テレサは跪き、そりたつたペニスをくわえた。マークは腰を前後に動かし始めた。ペニスが口に埋まる度に、巨大な陰囊がテレサのあごを打った。

確かに巨大な睾丸だった。テレサがそれまで付き合ってたどんな男と較べても。マークは、睾丸の大きさを自慢していた。それが彼の「男らしさ」の象徴だと自認していた。だがテレサは、そ

ういう時代遅れの「男らしさ」が、単なる女性蔑視でしかないことに、気づいたのだ。
思い知らせてやる……。

テレサは、そつと陰囊を手で包み込んだ。付け根を二本の指で縛って睾丸が逃げないようにし、
思い切りひねりあげた。

「ぎゃあああ!!!!!!」

マークが絶叫した。テレサはかまわず、力をこめて引つ張った。

「や……やめろ……この、メス豚!」

マークは身をよじって悶えながら叫んだ。

「こ……子どもができなくなっても……いい、いいのか……!!」

「いらないわよ、あんたの子どもなんか!」

テレサは怒鳴り返した。

「二度とセックスできないようにしてやる!」

言うなりテレサは陰囊から手を離し、拳を固めて殴りつけた。

「ぐう!!」

マークは眼を見開き、硬直した。一瞬、睾丸が平たくなったように感じた。信じがたい激痛に、

マークは両手で股間を押さえ、膝を突いた。

「て……てめえ……」

マークは涙を流しながら呻いた。

「この……腐れマンコが……」

その言葉を聞いたテレサは、マークの両手を掴んで立たせ、二度、たてつづけに股間に膝蹴り
を浴びせた。

「うう……」

マークはもはや絶叫する気力もなく、痙攣するばかりだった。

テレサは膝をつき、左右の手に一つずつ、マークの巨大な睾丸をつかみ、ひねりあげた。

「やめてくれええ……!!!」

マークは悲痛にわめいた。

「お……俺の金玉……潰れちゃうよお……」

「潰してんのよ!」

テレサは怒鳴りつけ、睾丸に強烈なアッパーカットを浴びせた。マークは白眼を剥き、仰向け
に倒れた。口からよだれが垂れ、半ば意識を失っていた。

「あなたが悪いのよ」

テレサは肩で息をしつつ、ベッドに腰を下ろした。

「もうちよつと優しく扱ってくれたら、こんなひどいことはしなかったのに……」

一息ついてから、彼女はダンスから自分の衣装や化粧品等を出して、バッグに詰め込み始めた。

彼が反省し、謝罪するまで、ここを出よう、と決意した。幸い、結婚前に済んでいたあアパー
トはまだ解約していない。しばらく、そこに住むことにした。

荷造りを終え、部屋を出ようとしたとき、突然、マークが起き上がった。怒りに燃えた眼で、
突進してきた。

テレサは、反射的に足を跳ね上げた。つま先が、股間にみごとにヒットした。つま先で、二つ
の肉の塊が変形する感触があった。

マークは一瞬硬直し、床にくずおれた。

「ばか……ちつとも分かってないのね」

テレサは軽蔑したまなざしを、うつぶせに倒れて痙攣するマークに投げかけ、部屋を出た。

その数日後。

テレサの部屋を荒々しくノックする音がした。

嫌な予感がした。訪問者は誰か、予想はついた。でも、逃げるのはよそう。テレサは決意を固
めた。決着をつけるのだ。

鍵を外すと、ドアが荒々しく開かれた。

「この、メス豚！」

訪問者は姿を現すなり、怒鳴った。

マークの父親だった。

「よくも、俺のかわいいマークを、台無しにしてくれたな！」

「台無し……?」

義父はわめきたてた。マークは、あの夜以来、高熱を発して寝込んだ。今日、病院に運んだと
ころ、一生、子どもを作れない体になったと宣告されたのだ。

「それじゃ……」

テレサは、こみあげてくる喜びを押し殺して訊ねた。

「マークは……」

「そうだ、貴様は、マークの金玉を潰してしまったんだ！ 殺してやる！」

義父が突進してきた。その凄まじい形相に、テレサは気おされ、リビングルームに逃げ込んだ。

「逃げるな！ メス豚！」

義父は、叫びながら追いかけてきた。リビングの隅に追い詰められたテレサの肩を掴み、床に
突き飛ばした。テレサは仰向けに倒れた。

義父は、テレサを見下ろしながら言った。

「この報いを受けてもらうぞ。お前は、かわいい息子を男でなくした。俺の孫を作るはずだった
金玉を、永久に使い物にならなくしてしまったんだ！ 貴様は、すべての男の敵だ！」

「そのとおりよ……」

テレサが、倒れたまま不意に、不適な微笑を浮べた。

「あんたの息子の金玉、潰してやったわ。このようにね！」

言うなり、右足を突き上げた。踵がジーンズに覆われた股間を襲った。

「ぐう！」

義父は呻き、股間を両手で押さえて腰を折った。

テレサは上半身を起こした。義父は、彼女を傷つけ、ひどい目にあわせるつもりなのだ。こちらから先手を打って、返り討ちにせねばならない。

義父の両手を払いのけ、すばやくジーンズを脱がし、足首まで引き下げた。

義父の股間が露になった。ペニスはたいした大きさではなかったが、その巨大な陰嚢にテレサは驚いた。マークのその倍はあった。

この巨大な睾丸こそが、マーク親子を傲慢にした諸悪の根源なのね。

こいつらの遺伝子を、永久に絶ってしまわねば……。

テレサは、右手で陰嚢を鷲づかみにし、くずおれそうになった義父を引っ張りあげた。

「うう……この、淫売……」

義父は叫んだ。

「そういう言い方は……」

テレサは、義父の顔に唾をはきかけた。

「絶対に許さない！」

言うなり、睾丸を膝で蹴り上げた。

義父は眼を見開き、口をあげたまま、倒れた。両手で股間を押さえ、床を転げまわった。

「女に暴力を振るうなんて、さすが血は争えないわね」

テレサは冷ややかに、悶絶する老人を見下ろして言った。

「でも、いまは二十一世紀よ。女が男の言いなりになる時代はもう終わったの。あんたらみたいな発想の男が生まれないよう、あんたの息子を去勢してあげた。あんたも、同じようにしてあげる。ご自慢の金玉、ぐちゃぐちゃに潰して、その粗チンを使えなくしてあげる！」

テレサは義父を仰向けにし、股間の手を払いのけ、両手で睾丸を一個ずつつかんでねじあげた。

「……や、や……やめろ……」

義父は息も絶え絶えに喘いだ。

「つ……潰れる……」

「もちろん、潰すのよ！」

テレサは、左手で陰嚢の根本をつまみ、睾丸を床に押し付けた。右手で、傍らのダンベルを持ち上げ、睾丸めがけて落下させた。

ぐしゃ！

鈍い音とともに、義父の体が大きくのけぞった。一瞬硬直し、それからだらりと、床に大の字

になった。

全身が細かく痙攣し、白眼を剥き、口から血反吐が垂れていた。

一時間後。

マークの家のドアがノックされた。

うちひしがれたマークがドアを開けると、テレサが立っていた。

マークはおびえ、思わず股間を両手で庇った。

「お義父さん、連れてきたわよ」

テレサが冷たい表情で言った。彼女の右手には、ロープが握られていた。ロープの垂れ下がった先を見ると、マークの父親が、仰向けに倒れていた。股間がむき出しになり、陰囊の付け根にロープが縛られていた。陰囊は赤黒く、いまにも破裂しそうに膨張している。

テレサは、気絶したマークの父親を引きずってきたのだ。

蒼白になり、がたがた震えだしたマークの頬をそつと撫で、テレサは微笑んだ。

「早く病院に連れていったほうがいわよ、玉なし君……もう、手遅れだけどね」